

昭和五十八年六月

蟹江市歴史民俗資料館

年報

第四冊

目次

「沿革誌より」	1
舟入の漁業について	9
蟹江地方の郷土食	33
蟹江郵便局沿革と思い出	41
蟹江新田と日光川	59
蟹江家古文書の特別展示について	75

舟入の漁業について

堀田 竹重

はじめに

蟹江川をゆっくり下って、やがて日光川に合流するあたり、ボラが川面に跳んで銀鱗を夕日に輝やかせている。水はもとの位置を流れ、魚が川に躍っても、そこに漁をする船とてなく、ただ見知らぬ釣人が無心に糸を垂れるばかり、二十年のときの流れを知らされる思いである。

「水郷かにえ」の名は広く知れわたり、佐屋川、蟹江川を中心にした釣りは遠く他府県からもその人を集め、休日ともなれば小舟が舳を並べ、ところせましと穫物を狙う態はまさに一大風物詩である。そして、それらの人々が手にする竿は高級ファイバー、伸縮自在に重宝なものばかりである。

それに引き換え、竹の曲がり湯の中でためし、何度も何度も矯正に時間をかけたりした漁具づくりや、櫓を漕ぐ甲に雪を乗せ、息を吹きかけて凍えを凌いだ舟入漁

業の昔は、その歴史を閉じてはや十年を過ぎ、今に二十年を迎えようとしている。いま、手元にある資料や僅かに残された漁具から、また、古老の物語から往時を振り返ってみたいと思う。

一、舟入漁業のおこり

蟹江町がまだ一つの陸地になっていなかった頃よりすでに人々は近在の池沼に魚を求め或いは遠く沖へ出て、漁を生活の糧としていたであろうことは次の一文をみても容易に察せられるのである。

舟入の船合戦（蟹江の鉄砲合戦とも言われている）の話は余りにも有名である。

天正十二年（一五八四）六月十六日の早朝より始った家康・信雄方の水軍は、近在近郷から徴集せられた大船・兵船・軍船・番船・小船・輕船と諸説あつて定かではないが、兎も角も、夥しい船が集められたことは事実であり、遠く戦国末期からこの辺りに漁を生業とする船が浮かんでいたことは想像するのに難くない。

蟹江地方の郷土食

早瀬 順造

一、蟹江のコメチャ（米茶）

お茶がゆ……蟹江弁ではコメチャとも云う。

お茶の持つ香りや味に加えて、生活の知恵とでもいっ
べき、いくつかのよさがあつて、この地方では長く食生
活で重宝がられてきたお粥である。腕に擦かけた名代の
佳肴といったぐいではなく、逆に何処の家でも（多く
は夕食に）さらさらと食べられてきたお茶がゆに風習と
しての重さがあるようだ。

或る本に「おかゆは炊いた飯に水を加えてやわらかく
したものであり、お茶がゆは飯を水のかわりにお茶でも
う一度にてやわらかくしたもの」とあつた。

しかしこれは蟹江でいうコメチャには当てはまらない。
コメチャはできあがつた飯から加工するものではなく米
そのものをはじめから、おかゆ式に炊きあげるものであ
るからだ。

現在蟹江町では二通りの方法がある。

一つは番茶を袋に入れて水の入った鍋に入れ、いわゆるお茶を煮立てその中へ米を入れる方法と、もう一つははじめから水の中へ茶袋と米を一緒に入れて炊く方法である。この二つのいずれにしろ鍋の中で百パーセント煮立ててしまうものではなく、沸々と炊き立て少々早目に火を切り、少々うましてから茶碗につける方がうまいとされている。

さて茶粥に添える副食物だが、昔からの俚謡にきいてみよう。

蟹江名物コメチャにココ

腹の中には心地よし

蟹江名物コメチャにココ

腹の中にはさわりなし

……とてことコメチャに似合うのは油っこい魚肉などではなく、アオヅケ（菜漬）かシソ、梅干、ココ（沢あん）などがピツタリと思われる。

昔は「サイクイピンポー」（菜食貧乏）といって、「

蟹江新田と日光川

小杉 正

一、蟹江新田

昔から人々は土地を得るために、汗を流し命をかけて来た。今は力いっぱいがんばることを「一生懸命」と書くが、もともとは「一所懸命」と書いた。荘園の争いも武士の戦いも、一所の土地のために命を懸けたものであり、最近では、イギリスとアルゼンチンの「フォークランド紛争」も、一つの小島の帰属を争う戦いであった。米が経済の基本とされた江戸時代には、田畑の増減が武士にとっても百姓にとっても、直接、死活につながる大問題であった。

そのため、どこの藩でも、米の増産、新田の開発に力を尽くした。

尾張藩では、寛永元年（一六二四）、御囲堤の外の立田輪中の築堤に、寛永十年には、入鹿村五百石を准漕用の池とするかわりに、尾張北東部の荒地を美田とする大事業に、藩をあげてとりくみ成功した。

その後も、新田開発に力を注ぎ、熱田から木曾川河口

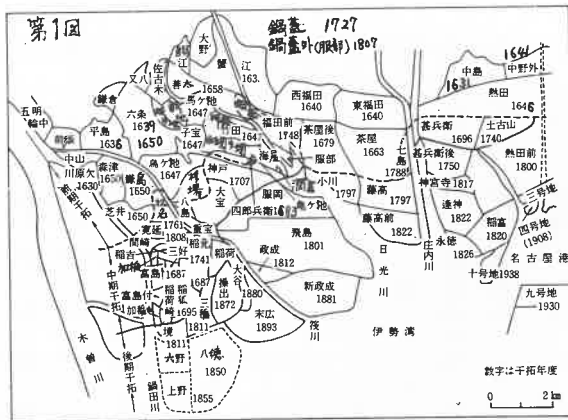


図4-29 伊勢湾沿岸の開拓新田〔庄内川流域史より、修正〕

にかけて、第一図のように、次々と新田開発が行われた。

当時の新田開拓はどのようにして行われたか。このあたりの農民は度々の水害にも負けず、人々はきびしい年貢のため、牛馬のように働いて

いた。しかし働こうにも田畑は限られている。

人口の割に田畑の少ない村の人々は、漁師になったりよそに田畑を求めなければならなかった。といっても、勝手に開拓するわけにはいかない。たとえ、ヨシ草の生